

現代は、天狗の話聞くことはほとんどありませんが、昔は祭るほど多くの地域で意識されていた存在でした。それは、天狗山や天狗岩などの地名が多く残り、「天狗の鼻の形に似ている」「天狗が暮らしていた」といわれていたことから分かります。天狗にまつわる説は多く、地域により異なりますが、一説には、天狗はイヌワシであったのではないかといわれています。かつて、山地では今よりもずっと多くのイヌワシが生息し、目立ったクチバシを持つ巨大な黒い鳥ということもあり、天狗と思われていたのでしょうか。子どもを連れ去っていくなどの伝説もありますが、真実は誰にも分かりません。

母国のスペインでは、イヌワシをたくさん見ました。岩山などが多く、ウサギやシカなどの野生動物や家畜動物も広い範囲で見られるため、イヌワシの生息に適した環境です。

スペインでは、イヌワシが子どもを連れ去っていくような話を聞いたことはなく、人間と十分に距離を置きながら多くの野生動物を捕食する重要な存在です。日本もかつては、ある程度そのような環境であったと思われますが、今はその面影はほとんどありません。日本のイヌワシ（漢字名で狗鷲）は体が少し小さい亜種で、今は亜高山から高山帯までの岩山やブナなどの原生林といった「本当の自然」に近い状況の山地でしかみられなくなっています。スギ、ヒノキの植林や開発などの影響もあり、生息場所が少ないことがその原因の一つと思われます。特に関東地方では非常に少ないため、西多摩では滅多にみられません。人為的圧力が主な原因となり絶滅してしまった二ホンオオカミと並び、イヌワシは大変重要な捕食者ですが、二ホンオオカミと同じような原因により「絶滅の道」を歩んでいることはとても切ない現実です。人間が受ける野性動物による様々な被害は、元を辿れば人間の行動に基づくことが多いため、一人ひとりが将来の自然に対する意識を高める必要があります。



昨年、秩父多摩甲斐国立公園内で見たイヌワシ。滑空する黒い姿はまるで天狗のように見えました。

市内では、イヌワシを一度も見たことはありませんが、他の地域では存在を確認しています。近年の森林整備によって、イヌワシが生息できる自然に近づき、いつかあきる野にも飛来してくることを期待するばかりです。
(パブロ)